

九九年九月十二日、午前十時二十三分、アメリカ合衆国のケネディ宇宙センターから、ぼんたちを乗せたスペースシャトル、エンデバーが、宇宙へ向かって打ち上げられた。シャトルは、ぐんぐんとすごいスピードでよっていく。そのときのスピードは、秒速約8キロメートル。音の二十倍のスピードだ。発射四十分後、あっという間に、ぼんたちは地球から三億キロメートルのところまでやってきた。ぼんたちのシャトルは、この高さを保ちながら、地球の周りを時速三万キロメートルで回り続ける。宇宙では、人間がうかぶこともできる。その水は宇宙が、「無重力」といって重さのない空間だからだ。宇宙では、重さだけでなく、上とか下とか右とか左とか、そんなことも関係なくなってしまう。君は、深い海やプールの中にもぐったことがあるだろう。無重力の世界は、そのときの感じと似ている。水にもぐると、体が水の中でふわっとうかぶ。そのとき、まるで体の重さがなくなってしまったような気がしなかっただろうか。そして、ときどき、上も下もなくなったような気がしなかっただろうか。無重力はふわふわと、とても気持ちいい。力を入水なくとも、いろんなことが簡単にできる。でも、いつもういていると、ちよっとこまるときもある。そんなときのために、ゆかのおちこちにはベルトが付いている。その水で体を留めて、うかないようにするのだ。無重力の中にいると、ぼんたちの体にもおかしなことがいろいろある。例えば、地球にいるときより顔がふくらんで、反対に目は細くなってしまふ。どうしてだろう。その水は体の下の方にあつた体液が、無重力のために頭の方へうきよかってくるからだ。でも、だいじょうぶ。二分もすればなれきて、ちやんとふつうの顔にもどる。シャトルのまどから外をみた。地球だ。台風のお雲がわたした。真ん中に丸くあながあいている。あそこが台風のお目だ。あの雲の下に、ど水だけの人や生き物たちがあるのだろう。宇宙から見る地球のさまざまな風景。いろんな形、いろんな模様。その水をおていたぼんは、この地球の風景と、ぼんがけんび鏡でのぞいていた生き物の小さな細ぼうとが、とても似ていることに気がついた。そうなんだ。地球も生きている一つの大きな生き物だったんだ。宇宙からおたとき、そのことがとてもよく分かった。宇宙に行つたのは、ぼんたち人間だけではない。コイやカエルやハチ、植物などのいろんな生き物もいっしょに宇宙へ行つた。宇宙では、どんなことが起こるか、なぜそんなことが起こるのか、まだまだ分からないことがたくさんある。ここから、もっとたくさんさんの人や生き物が宇宙へ行くことができるように、いろんなことを調べたり実験したりしなくてはならない。ぼんが宇宙へ行つたのは、その実験をするためだ。